

## 御代田町産ライ麦ストロー作りの活動を通した

### 他業種との協働による共生の地域づくり

#### ～MIYOTA ライ麦ストロープロジェクトの取り組み～

MIYOTA ライ麦ストロープロジェクトメンバー

御代田町社会福祉協議会 ケアマネージャー

東城美苗

#### プロジェクトを始めた経緯

レジ袋が有料化され、脱プラスチックが加速する中、住民主体で脱プラスチックに貢献するライ麦ストローの取り組みを始めた。麦わらは、英語で「straw（ストロー）」というように、茎の中が空洞になっており、明治時代から戦後にかけて実際にストローとして使われていた。町でもかつては、牛馬の飼料等としてライ麦が盛んに栽培されていた。

ライ麦ストローは、クラフト作家の上原かなえ氏（フィンランドの伝統工芸である「ヒンメリ」（麦わらを使ったモビール）を自前のライ麦にて製作し、都内や軽井沢で教室やワークショップを開いています）がストロー作りに関心があり、御代田町社会福祉協議会（以下、社協）と思いを共有したことから始まった。

2019年9月に試行的に社協の通所介護事業所と宅老所、グループホーム各2ヶ所の利用者の方々との協働で下処理作業を行った（※ライ麦は、下部の太い部分がストローの材料となり、上部の細い部分がヒンメリの材料となる。ストローの下処理作業は、1本1本の葉をむき、節をカットし、洗浄・煮沸・乾燥の工程を得て完成する）。

社協と関わりのあるボランティアの協力も得て、延べ100人以上の方が関わる事ができた。昔ライ麦を育てており、昔話に花を咲かせる方や繊細で美しいヒンメリ細工に感銘を受けた方など、様々な反応があった。

9月に御代田町役場庁舎で開催された「長野コーヒーフェスティバル」（来場者約6,000人）にて、ライ麦ストローの配布をはじめ、2020年1月には台風19号の被災支援チャリティイベント「誰かのためにみんなのために冬のあったかマルシェ」にて、ライ麦ストローの取り組みを紹介し、好評を得た。

#### MIYOTAライ麦ストロープロジェクトの活動

イベントを通じて、ライ麦ストロー作りの機運が高まり、2020年4月、クラフト作家、デザイナー、農家、社協、ボランティアの連携・協働による「MIYOTAライ麦ストロープロジェクト」が立ち上がった。7月にはライ麦を刈り取り、天日で干し、8月から通所介

護事業所に通う利用者と本格的に作業を開始した。週2回、10人前後の利用者と昼食後の自由時間を活用し、和気藹々とした雰囲気の中、慣れてくると若年者以上の手さばきで作業できていた。地域の役に立てているという自己有用感を得ることができ、作業後には握力測定で効果が出るなど、フレイル予防にも効果が期待できると感じる。ボランティアは5～7人が参加し、中にはこもりがちになっていた方も役割を担うことで生きがいに繋がることなどのきっかけとなっている。

下処理作業後のライ麦は、社協の障害者就労継続支援B型事業のやまゆり共同作業所にて長さ・太さを揃えて、包装を請け負っている。作業工程も試行錯誤を重ねることにより、日に日に効率が上がり、作業日を楽しみにされている利用者もいる。

完成したライ麦ストローは、プロのデザイナーが関わり、作製した紙パッケージにより商品化され、ECサイトや町内外のカフェやレストラン、直売所などの販路が得られている。2020年は5600本が完売した。

2021年3月には社協主催の「春のあったかマルシェ」、7月には、町内のボランティア団体「みよたぐらし」主催による「ライ麦ストロー収穫祭」、11月には「幸せぶくろ」主催による「もったいない市」にて販売する機会があった。親子でのストローづくり体験ワークショップも数回企画、実施した。

今年度も町内の畑で収穫したライ麦を社協の各介護事業所にてボランティアと一緒にカット作業をレクリエーションの一環として取り入れている。やまゆり作業所にはカットから洗浄作業も追加し業務委託し、昨年比の倍量の生産を見込んでいる。

## プロジェクトの目指していること

ライ麦ストローの活動を通じて、自然に優しい持続可能な町や社会の構築、また高齢者や障害者など地域の方々との協働により進めることで地域共生社会づくりへのモデル実践となることを目指している。今年度は、中学生ボランティアやSDGsの実践研究に取り組む高校生と通所に通う高齢者と一緒にカット作業を予定していたが、コロナ禍で中止になってしまった。今後、学生との協働作業も広げていきたいと考えている。また町内の他ボランティア団体「ちょっくら」との連携による障がい者の職業体験との連携も図っていきたいと考えている。

ライ麦は、ストローにとどまらず、茎はヒンメリやストローハットなど麦わら細工に、穂はパンやお菓子、ビールにと、町の新たな特産品としての可能性を秘めている。

今後更なる発展ができるよう、地域の皆様と共に歩んでいきたい。